

社会とかかわる

校長 田邊 道行

新しい教育目標「よりよくかわる」は、様々な人・もの・こととのかかわりを考慮していますが、その一つに社会とのかかわりがあります。家庭、学校、地域など、子どもたちが生きる様々な社会には、みんなでマモルこと（マナー、モラル、ルール）があります。ですから、社会で生きるためには、自分の「思いどおりにならないこと」や「不満を感じることを我慢したり、調整したりしていく必要があります。

思いどおりにならないことに耐えられない子ども

最近の学校で現れる子どもたちの不適応の特徴の一つとして「思いどおりにならないことに耐えられない」ということがある…と話すのは、現役スクールカウンセラーの藪下遊さんです。

親や周囲の人から叱られた経験が少ないからか、泣いてわがままを言えば親が折れて妥協してしまうからか、自分の『思いどおりになるのが当然』と考えるようになってしまっている子どもが増えているというのです。その例として挙げられているものを2つ紹介します。

一つは、授業時間が長いから学校に行きたくないという子どもです。それに対して、親は「子どもが嫌がるので…」と子どもに言われるがままとなり、学校に連れて行くことができません。連れて行っても子どもの涙作戦には勝てずに連れて帰ってしまいます。そうこうして学年が進んでいくうちに、学力は同学年の子どもに追い付かない状態になり、友達とのかかわり方も分からなくなってしまったという例です。

もう一つは、同級生とのやり取りで自分の要求が通らない状況や否定的な場面で「いじめられた」と主張する子どもです。例えば、自分がやりたい遊びができないとき、ドッジボールで当てられたときなどにそういった発言が見られます。親は子どもがいじめられていると考え、対応や謝罪を学校に要求してきたという例です。

この二つの事例の印象はずいぶん異なるものですが、共通しているのは「思いどおりにならない場面」に対して子どもが不満や拒否感を抱えているということです。どうして彼らはここまで「思いどおりにならない場面」に対して不快を覚えるのでしょうか？それを藪下さんは次のように説明します。

「押し返し」が子どもの心を育てる

一歳を過ぎたあたりから、子どもは「外の世界」と本格的にかかわり始めるわけですが、まだまだ分別がつかない子どもですから、やってはいけないことをたくさんやってしまいます。回っている扇風機に指を突っ込もうとしたり、階段から落ちそうになったり、高いところに登ろうとしたり、とにかく親がハラハラしたり、びっくりするようなことを平気でします。こういうことを子どもがやりそうになったときに、親を中心とした「外の世界」に求められるのは、子どもの行動に対して適切に「押し返す」ということです。

この「外の世界から押し返される」とは、簡単に言えば、叱られる、止められる、いさめられるといったこととなります。子どもが社会的な存在として成熟していくためには、こうした「世界からの押し返し」を経て、現実に合わせて自分を調整するという経験が絶対に必要なのです。

親が子どもの要求に全て完璧に答えてしまうと、子どもにはいつまでたっても欲求不満に耐える力が身に付きません。現代の世の中には「自由にさせてあげた方が良い」「叱るのはかわいそう」という風潮があることは承知しています。しかし、適切に叱る、止める、いさめることが「子どもの心の成熟」を促し、むしろ子どもの現実認識（現実を現実として適切に捉える力）を高めていくことにつながるのです。

「外の世界に合わせて自分を調整する」という体験は、子どもにとって非常に不快なものです。それまでは泣くなどの行為を通して、親に「環境を変えてもらっていた」ものが、自分が環境に合わせてくなくてはならない状況となるのですから、その不快は自然な反応と言えます。

ただ、こうした状況で大切なのは、子どもの不快感が生じないように親が環境を調整することではありません。「思いどおりにならない環境」に出会ったときの不快感を親子関係の中で受けとめ、なだめながら納める力を育てていくことです。「授業時間が長いから嫌!」と言われたとしても、「時間は学校のきまりだから、しょうがないよ」「集中していればあつという間だよ」と声を掛けて送り出すことが大切です。子どもは、「先生が〇〇するのが嫌」などと別の理由を次々と作り出しますが、そのときに生じる不快感を「そういうこともあるよ」「大丈夫だよ」とポジティブに考え方を換えさせたり、「しょうがないよ」と一緒に困りつつも受け止めたりすることによって、子どもの調整力を向上させていきます。

「ならぬことはならぬものです」

学校は多くの子どもにとって「思いどおりにならない場所」です。同年代の子どもの中で好き勝手ばかりはできませんし、定められた時間に定められた学習をすることになり、行動は制限されます。こうした学校の在り方こそが不登校の原因であると考えられる人もいますが、社会性を育むことを考えれば、子どもがその状態に慣れていく必要があります。子どもたちは、学校という「思いどおりにならない場所」での体験を通して、不快感を納め、環境との調和を経験していくということになります。子どもが「社会的な存在として成長する」ということを目指すのであれば、家庭や学校で経験する「思いどおりにならない体験」の価値を私たち大人がしっかりと理解しておく必要があります。

昔の話で言えば、会津藩では藩士の子どもを「什（じゅう）」と呼び、遊ぶ前に、年長者が「什の掟（じゅうのおきて）」を言い聞かせることになっていました。そして、その什の掟は、「ならぬことはならぬものです」という言葉で締めくくられていました。「ならぬことはならぬものです」という言葉には、「人としてよりよく生きていくためには、理屈や言い訳が通らない、絶対にやってはいけないことがある」という意味が込められています。この「什の掟」により、思いどおりにならない体験をした子どもたちは、人とのかかわりを見つめ、自分の生き方を見つめ、立派な藩士に育っていったとのことでした。

当校は、褒める、認めることはもとより、叱る、止める、いさめるという「押し返す」場面をしっかりと捉え、子どもが社会とよりよくかかわるために必要な経験を大切にしていきます。子どもたちが「押し返し」に耐える力を付けられるよう「ならぬことはならぬ」という線を保護者や地域の皆様と協力して引いていきたいと考えています。



つばさ学年(2年生)

<学年目標>

つよい心と体で
 ばっちり しゅうちゅう
 さいこうの なかま つばさっ子

身近な地域や人、野菜、生き物などのかかわりを通して、わくわくする活動をいっぱい楽しんできました。「つばさ農園」は、今、収穫の喜びにあふれています。たくさんの人の応援をいただきながら、いろいろなことを発見し学ぶ姿がありました。まだまだ、わくわくは続きます。これからも、2年生の成長ぶりにご期待ください。

収穫の喜びでいっぱいの「つばさ農園」



三八の市では、農家の方にインタビューしてきました。よく売れる野菜は何ですか？

イルカのジャンプに大歓声！「うみがたり」でたくさんのお気に入りを見つけました。



夏野菜カレー作りに、新じゃがも間に合いました。



ひかり学年(5年生)

高学年になったひかり学年。学校の「首」として、かけはし班や委員会活動で、自分の役割を果たしています。のびやかな学習では、米作り活動を通して、農業や食について深く学んでいます。自然教室では、豊かな自然の中で、仲間と楽しみ、協力することの大切さを学び、絆が強まりました。

5
 学校の首になる
 だれとでも協力する
 ルールを守る
 意見をしっかり言う
 何事にもチャレンジ!



田起こし



田植え、一生懸命手で植えました。

オリエンテーリング



妙高アドベンチャー



キャンプファイヤー

